名誉会員からのメッセージ ~次代を担う若者に向けて~

より良い自己実現のプロセスと クロスメディア

名誉会員 和久井孝太郎[†]

キーワード：自己実現、クロスメディア、創造、エンジョイ、調和、メディアリテラシー、ベンローズ三角形、情報とは何か、部分最適、全体最適

1. 序文に代えて ~最後のテレビ誌 (1996年12月号)「ふぉーかす」“テレビジョン学会から映像情報メディア学会へ”の再掲¹⁾ ~

先日、編集長の原島先生から「テレビ誌としては最後となる予定の12月号に寄稿を」とのお話があった。名誉なことだと喜んでお引き受けはしたが、日本語の「テレビジョン」という表示がなくなるのかと思うと寂しい気がする。しかし、新たな時代へ向けての飛躍と考えれば元氣も沸いてくる。

今日、一般の人々にとって「テレビジョン」から連想するのは、テレビ放送であり、テレビ受信機(テレビ)である。全世界ではすでに10億台を超えるテレビが使われており、累積出荷台数6億台を超えたとされるホームVCR(ビデオ)とともに、世界最大の映像情報インフラを形成、先進諸国ではそれぞれの映像文化を形成している。過ぎし夏のアトランタ・オリンピックでは、茶の間やリビングのテレビ・ビデオを通して、延べ400億人を超える人々が大会に参加した勘定になる。

テレビジョン技術は、画像・映像技術の中核であり、今後ともその重要性に変わりはない。しかしテレビジョンは、人々の生活の場において日常茶飯な存在の「テレビ」と強く結び付き、言葉として身動きが取れなくなっている。このことはテレビジョン技術開発・実用化の大成功を物語るもので、本学会は、ルーツである「テレビジョン同好会」を戦後いち早く1946年11月に発足、1950年には「テレビジョン学会」と改称、1955年には文部省認可の「社団法人テレビジョン学会」となり、そして、今日までこの分野の科学技術と産業、文化の発展に大きく貢献できたと評価したい。

名は体を表す！ 学会の名称変更とは、自己表現(プレゼンテーション)の変更のみならず、自己の再確認(アイデンティフィケーション)による、新たな時代へ向けての目標創造と自己改革の運動に他ならないと考える。

アイデンティティとは、「自分は何者なのか」という自己認識のことである。専門家はさらに、「何者になりたい」という自己願望と、「何者である」という自己評価と、他者からの評価「何者とみなされているのか」の三つの要素によって構成されていると説明する。そのことはともかく、本学会ならびに会員諸君が今後の活動を通して、新時代にふさわしいアイデンティティを確立されんことを希望する。

メディアとは情報表現・伝達的手段・手法のことであり、広義にはコミュニケーションのための社会装置のことである。メディアが変われば社会が変わり、社会が変わればメディアが変わる。メデ

"The Process of Better Self-Realization and the Cross-Media" by Kotaro Wakui

和久井孝太郎 1950年、米沢工業専門学校電気通信科卒業。同年、NHK入局。1986年、(株)電通顧問・メディア開発局長。1998年より、(社)日本印刷技術協会副会長。工学博士。名誉会員。

アと社会は相互に不可分な存在である。来るべき21世紀には、20世紀問題を克服、より調和ある世界を実現すべく本学会の一層の活躍を期待する。

2. より良い自己実現とは何か？ そして『調和』とは何か？

今や待ったなしの地球環境問題、世界を巻き込み混迷の度を深めるアメリカ発の金融危機への対応、貧困と格差の解消など、私たちは今、20世紀を総括し、清算して、より調和のとれた21世紀の社会を築くべきスタートラインに立っている。

一方、私たちは誰でもが“より良い自己実現”を目指す権利を有している。

図1は、より良い自己実現のプロセスを示した三角形であるが、同時に調和とは何か？の説明をも兼ねている。人間とは限らず“生きとし生けるもの”すべてが、何かを造り出す活動をしている。まず、新しい価値を生み出す「創造」について考える。

私たちが自らの精神活動によって、新たなものを創造するためには、まずそのことを想像して挑戦しようと思えることが最初であり、伝統に固執せずに「変化を乗り越える」意志のエネルギーが必要である。その際の具体的な推進力は、いろいろな情報を自分の意識の中で発酵させた「ものごとの本質を見抜く」力と、みずみずしい想像力すなわち「柔軟な発想」との相互効果によって得ることができる。

現代生活にあっては、私たちの知識や世界観、価値観すらも、多様なメディアを通してもたらされる膨大な情報によって大きく左右される。現実的にも自らに関連する論文やレポートに目を通すのに、多大な努力を払っている仲間も多いはずである。

同時に自らの情報発信能力を高める必要がある。質の良い情報を発信するところに、他者からも質の良い情報が集まるからである。

図1 より良い自己実現のプロセス

このようなメディア問題は大変微妙だ。なぜならば、私たち自身がメディアの進歩を推進する当事者の一人だからである。メディア開発で最も重要なことは、そのことを通して社会の調和ある発展に貢献する志を持つことだ。したがって、私たちは「メディアリテラシー (Media Literacy)」に関して、プロとしての見識を有することが不可欠である。

21世紀メディアの基本認識については次章で述べる。

次に「エンジョイ」について考えてみよう。筆者は、**現実的な枠の中での「自己の能力の十分な発揮」**が「エンジョイ」であり、システムの古い枠組みを超えようとする営みが「創造」であると考えている。

生を享受(エンジョイ)するためには、例えば、スポーツにおけるエンジョイを想像すればよくわかると思う。スポーツでは、練習と努力の積み重ねで「自己の能力の十分な発揮」が可能になるが、試合などで能力を十分に発揮できれば、心が満たされて「エンジョイ」の境地に至るのではないだろうか。全力を出し切れば、仮に試合に敗れても得られるものは大きい。

いずれにしても、自己に対する自らの「思いやり」、すなわち「自尊」の心が大切である。自己を否定し、真に生を享受することなどできないと思う。同時に「柔軟な発想」で自らの潜在能力を発見し、自己改革しようとする努力も必要なのではないだろうか。

だが、「創造」と「エンジョイ」だけならば、爆音をとどろかせオートバイを自由に乗り回す暴走族も、彼らの価値観でそれなりの創造とエンジョイを実現している。しかし暴走行為は、最低の倫理規範である法律を犯し、著しくはた迷惑で他者(他力)との「調和」を欠いていると言わざるを得ない。

より良い自己実現には、「創造」「エンジョイ」とともに「調和」が不可欠である。「調和」は、自力の発揮とともに自己以外の「すべてのものの機能発揮」、すなわち他力を発揮させることで実現するものである。自らが積極的に「調和」を求めるためには、他者に対する「思いやり」(他者は人間のみならず自然を含む)と「ものごとの本質を見抜く」ことによって道が開けることを図1は示している。

以上のことは、オーケストラ演奏におけるハーモニー(調和)を想像してみればよくわかる。演奏力に自信のあるある一人の演奏者が、唯我独尊で演奏したのは、オーケストラとしてのハーモニーは得られない。他力が最大限発揮できるように気配りして演奏してこそ絶妙なハーモニーが得られ、自力も発揮できる。

いわずもがな人間は大宇宙(自然)の一員である。人間は一人では生きられない。絶対なるものとの調和に思いを至ることは極めて重要なことだが、科学的な進化論を全面的に受け入れるか否かなどは、私たち一人ひとりの心の問題であり自由である。筆者自身は年輪とともに、「より深い調和を志す」ということで良いのではないかと考えている。この課題の基本構造については第4章でさらに検討する。

3. 21世紀メディアの基本認識としてのクロスメディア

筆者がNHKを卒業して電通の顧問に就任したのは、いわゆるニューメディアがマルチメディアに収斂を始める前の1986年末のことであった。電通には20世紀末まで在籍したが、その前半ではメディア開発局長を兼務した。その間で得られた知見をもとに、本学会にメディアに関連するいくつかのレポートを提出した。例えば、『ニューメディアの進展』²⁾、『メディア社会の動向』³⁾、『映像情報メディアは文化になり得るか』⁴⁾、『緊急課題としてのメディアリテラシー向上』⁵⁾などである。

『メディア社会の動向』の中では、読者がメディアやメディア社会を抽象的に思考する。あるいは、メディアビジネスを具体的にプロデュースする参考に供するために『マルチ・メディア曼荼羅(多媒介曼荼羅)』とその構成原理を提示した。

この曼荼羅は当然のこととして、インターネットに接続したPC端末などで文字や画像、音声、通信、コピーやプリントを統合的に制御する、いわゆる「マルチメディア」を内包していた。

20世紀にあっては、前世紀から引継いだ印刷メディア（新聞・雑誌など）や写真メディア（写真・映画）などに加えて、有線通信メディア（電話・FAXなど）、電波メディア（無線通信・ラジオ・テレビなど）、コンピュータメディア（情報処理、コンピュータ通信など）が世紀中盤に台頭し、さらには世紀終盤にあってデジタルメディア（PC・インターネットなど）が飛躍的に発展して、多媒介社会（マルチ・メディア社会）が出現した。

しかし、20世紀型メディア社会にあって一般の生活者は、メディアの一利用者や視聴者であって、それぞれのメディアの実権は各メディアの運営者の手にしっかりと握られたままであった。

それから10余年、現在までに21世紀メディアの特徴が明瞭になってきた。その状況を図2に『クロスメディア曼荼羅』として示した。20世紀のメディア社会と21世紀のメディア社会を比較した場合、最も大きい相違点は、メディアの実権が個人や消費者に移りつつある、という事実である。

『クロスメディア曼荼羅』の図柄自体は、1995年に示した『マルチ・メディア曼荼羅』の図柄をこのような今日のメディア状況に応じて若干修正したものである。決定的な違いは、『クロスメディア曼荼羅』の中心に位置しているのは、われわれ個人であるという点にある。

今や私たちは一つの必要に応じて複数のメディアを統合的に利用することが容易にできるようになりつつある。また、個人から社会へ向けての情報発信手段もいろいろと整備されつつある。この傾向は時代とともに一層進むことになる、と筆者は考えている。

メディアの交点のことをクロスメディアのハブ（車軸）と呼ぶ。会員皆さん自身の状況はどうだろうか？ それぞれの個人が、クロスメディアのハブに位置していて、自らのPCで無料検索サイトGoogleを利用し、その先のさまざまなメディアに飛ぶなど、日常茶飯に行われているのではないだろうか。マイ携帯電話しかりである。また、クロスメディアのハブとしての役割を果たす、マイホームページやブログを運営している会員もおられるだろう。

個人のメディアリテラシー格差（あるいはメディア格差）は、社会の格差につながる。今後早い機会に、高齢者のためのマイパートナーロボット型のクロスメディアハブ端末の実用化が望まれる。現在のPCや携帯電話ではマイパートナーロボットとしての機能も能力もまったく不十分である。また、クロスメディア時代のメディアリテラシー教育環境の整備を急ぐ必要がある。

メディアは、自然とともに人間のもっとも重要な生活環境である。また、文化の重要な担い手であり日々淘汰圧力にさらされている。それぞれのメディアは、時代の先端技術の動向が敏感に反映される宿命にある。この場合、ハードパワーのみならずソフトパワーが大きな影響を及ぼす。

伝統的なメディア企業もクロスメディアの動向を無視するわけにはいかない。メディア企業は、淘汰圧力に打ち勝って生き残りを図ることが最も重要な使命である。ジャーナリズムといえどもその域外ではあり得ない。

2008年12月16日の朝日新聞の第1面に「“本社、テレビ朝日・KDDIと事業提携”朝日新聞社は15日、テレビ朝日、KDDIと、多様なメディアを組合せた「クロスメディア」での新サービス創出に向け、3社が連携していくことで合意した。第一弾として、KDDIの携帯電話の待ち受け画面を活用した新しい情報配信サービスを、3社協業で来年夏から始める予定・・・」という記事が載った。

朝日新聞とクロスメディアのダブルキーワードでGoogle検索すると約96,000件のデータが得られる。ご興味のある方は、一度試されたい。

図2 クロスメディア曼荼羅

4. むすびにかえて～さらに重要な課題が残されている～

20世紀の社会では、部分最適化は大いに進展した。そのことに関して諸学の発展が寄与した。なかなか、科学技術の貢献は目覚ましいものがあつた。しかし、全体最適化に関しては、ほとんどすべてが21世紀に先送りされた。その課題の一端が地球環境の問題であり、国際金融問題である。

科学技術的にも、例えば『情報』とは何か？と改めて問われると、私たちは答えに窮する。私たちは、“映像情報メディア”など情報という言葉で、日頃いろいろな場面で自由に使いまわしている。しかし、情報の本質をまだ知らない。

人間に限らず、動植物も、それらを形作る細胞も、ウィルスですら情報あつての存在である。情報は、人間社会だけのものではない。すべての生物でDNAなど細胞レベルでの重要な情報もあるし、植物でも外部情報に敏感に反応するといった観測レベルのことなら私たちは知っている。

まずは、“物理学的に情報とは何か？”そして“自然における調和とは何か？”について思いを巡ら

図3 情報とは何か？

し、私たちは全体最適化を希求する必要がある。

このことに関して図3を示す。この3角形の基本構図はペンローズの3角形と呼ばれ、オックスフォード大学の物理学者ロジャー・ペンローズが考案したものである。

ペンローズ⁶⁾は、「物質的世界は、プラトンの世界の一部から生じます。だから、数学のうち、一部だけが現実の物質的世界と関係しているわけです。次に、物質的世界のうち、一部だけが意識を持つように思われます。さらに、意識的な活動のうち、ごく一部だけが、プラトンの世界の絶対的真実にかかわっているわけです。このようにして、全体はぐるぐる回っていて、それぞれの世界の小さな領域だけが一つにつながっているようなのです。もちろん、これは私個人の信念にすぎません。もう一つ指摘すべきことは、基本的に、すべては数学に支配されていると考えていて、数学的でない要素は、この図では考慮されていないということです」と話していた。

話を図3に戻すと、図に書込んであるプラトンの世界、物理的世界以外の書込みは、すべて筆者の独断と偏見で書込んであると考えてもらってよい。

20世紀における科学の進歩によって、物質世界の物質とエネルギーがすっきりした数学関係で結ばれたように、21世紀には物質とエネルギーそして情報がすっきりとした数学関係で結ばれることを筆者自身は夢見ている。

もしも、そのようになれば、20世紀におけるDNAの発見がプラトンの世界に決定的なインパクトを与えた以上のインパクトを与えることとなり、21世紀が必要としている全体最適化の進展にも大いに貢献するのではないかと私は思う。

(2009年1月9日受付)

〔文 献〕

- 1) 和久井：「テレビジョン学会から映像情報メディア学会へ」，テレビ誌，50，12，p.1827（1996）
- 2) 和久井：「ニューメディアの進展」，テレビ誌，45，12，pp.1557-1562（1991）
- 3) 和久井：「メディア社会の動向」，テレビ誌，49，11，pp.1403-1409（1995）
- 4) 和久井：「映像情報メディアは文化になり得るか」，映情学誌，52，pp.33-36（1998）
- 5) 後藤和彦，原島博，和久井：「座談会：緊急課題としてのメディアリテラシー向上」，映情学誌，54，4，pp.538-547（2000）
- 6) ロジャー・ペンローズ（竹内薫，茂木健一郎訳）：「ペンローズの量子脳理論」，徳間書店，pp.73-74（May 1997）